アブストラクトデイズ

デッド星奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アブストラクトデイズ

【Ｎコード】

Ｎ１６８７Ｙ

【作者名】

デッド星奈

【あらすじ】

両親を事故で失った成瀬東は、東京都に移り住むことになる。東京都では様々な怪事件が起きるが、本人はひょんなことをきっかけに日常からちょっと逸脱した日常を過ごしながら、怪事件を興味本位で調べることになる、限りなく不幸で、残酷な一人の少年の物語。

僕と幸せ（前書き）

この物語を読むに時に読者の皆様に気をつけて頂きたい、事柄がある。この物語はアブストラクト、つまり抽象的な日常を描いた物語。いまある常識を全て捨て去り読むことを、強く推薦する。また残酷極まりない行動をとる主人公たちが許せない方々は読むことをオススメできない。

　この物語に出てくる人物たちは少なからず精神的におかしく、読者の皆様に悪影響を及ぼす可能性もある、それでも「大丈夫だ、問題ない」という方はアブストラクトデイズをお楽しみ頂ければ幸いである。

※横にして読んで下さい！

僕と幸せ

寒い冬の事だった。

雪が降り積もり時間がたち氷になる、朝日に照らされキラキラと輝きながら車道に張り付いた氷。僕は家族と静岡県の旅行に来ていた、両親の運転する車の心地よい揺れに身を委ねながら、窓の外を見ていた。車の中は家族らしい話が続いていて楽しい一時を満喫していた、あともう少しで目的地の旅館に着く。そこで入る温泉やおもてなしの食事の数々をかってに想像したりもした。

車が赤信号で止まる、息を吐くと車の中でも白くなる、運転席の父がアクセルを踏み、助手席の母が地図を見るそんな姿を僕は後ろから、ただ見つめていた。信号が青になる父がブレーキを放しアクセルを踏んだその時だった、交差点の右側から大型のトラックが叫ぶようにして、凍った道路を滑り、僕が乗っていた車の前方部分にぶつかる。滑る勢いがかなり強く、トラックは僕の乗っていた車を押し進み、そのまま民家の塀にトラックごと突っ込んだ。

民家の塀にぶつかった瞬間、車前方部分が塀とトラックの間に挟まれる様にしてペシャンコになった。赤く生暖かい液体が僕に飛んできて、顔に付いた。血だ、血はほとんどが、潰れたフロントガラスに広がる様にして付着していた。もちろん僕にも大量に。僕は両親が絶命した瞬間を一生忘れる事はないだろう。おびただしい血の量、人はこんなにも、あっさり死んでしまうのだ。

葬式の時僕は、ただ喪失感に埋もれていて、誰が声をかけても返事をしなかった。親戚連中が集まって何か話し合いをしていたのは覚えてるけど、何を話していたか、理解する気力もなかった。しばらくして伯父が僕を引き取る事が決まった。伯父は東京都に住んでいて、僕は実家の茨城を離れることになった。

心に空いた穴、この穴を埋めていた両親はもういない、両親を奪った人間を憎いと思うのが普通だろうけど、僕はそんな事を思う暇

すらなかった。早く新しい環境に慣れなければ、そういう事の方が自然に僕の中で優勢された。
　東京都に移って、伯父の娘である年が一個上の、加奈子に出会う。小さな頃よく遊んだらしいが、覚えてない。正直伯父とは生活の習慣の違いや意見の食い違いなどがあって、仲は良くなかった。伯父と喧嘩した時いつも気を使ってくれたのが加奈子だった。東京都に移ってから唯一の心の支えだった。
　それから二年が立って高校一年になった頃、僕は一人暮らしを始めた、加奈子にお礼を言った後、家出て
高速道路の横のマンションの五階の狭いワンルームだけど、充実した生活は送れそうだ。
「アズ、本当に大丈夫？」
「大丈夫だよ、かなねぇ僕は男だよ？　本当にありがとうね」
「困った事があったら何時でも言ってね」

　狭いワンルームの一室、荷物を下ろして家具をチェックして、僕は早く寝ることにした、東京の夜は田舎と違って騒がしい、マンションのすぐ隣が高速道路という事もあって、仕方ないと思った。部屋に布団を敷き、布団に入る前に扇風機を切る。明日から新しい一日が始まる。
　暑い夏、七月十一日のことだった、朝起きて制服にいつもなら着替えるが、僕はそうしなかった。理由は分からないが、体が疲れ切った感覚が残っていた。まるで大量の本を背中に乗っけられている様な体の重さ、僕はその日学校に行かなかった。行かないまま数日経ち夏休みになっても、体のダルさは抜けなかった。
「あーうー畜生」
部屋で扇風機が何度も首を振り、風が当たる度に少しだけ涼しいのを実感できる。なんとか体を起こし窓を開けて日の光を浴びて体をリセットする。眠い目をこすり今度は私服に着替える、黒いシャツ

に普通のジーンズ、変わった特徴のない私服だ。そして部屋の机に置いてあるノートパソコンを立ち上げた。

奈落「ういーす」

正和「オハヨー、一人暮らしはじめてから、学校にロクに行ってない」

奈落「いけよw」

正和「体が動かないんだ！」

ペルシャン「あなたは今パソコンをしているつまり体は動く」

奈落「動いてるよね普通に」

正和「言い方を変えよう、外に出るほど元気がない。」

ペルシャン「外ね、夜の外出は控えた方が最近はいいよ東京」

奈落「なんで？」

ペルシャン「通り魔がでるんだって」

正和「あー、テレビのニュースで今やってる」

奈落「ナンチャン？」

正和「フジテレビ」

ペルシャン「本当だ、もう１０件目だよ」

奈落「近い地域みたいだね、同一犯の可能性ありか」

正和「おー（＾ω＾；）怖い怖い」

奈落「いま詳細ググったら、現代のジャックザリッパーなんて言われてる」

ペルシャン「マジ？wそりゃすごいな」

奈落「証拠一つ残らない、必ず首を一閃！かっこいい！」

正和「かっこいいのか？ｗｗｗ」

チャット画面を閉じて、完全に目が覚めた僕は、マンションの外に出た。外は太陽の光が肌にジリジリと焼け付く様に刺す、ものすごい暑さだ。東京に来て二年近く経つが未だに、土地勘が付かない。移動にはほとんど電車を使用する為か、歩いての移動は苦手だ。

気まぐれで普段使わない道のりで駅に行こうとする、ビルに挟まれた細長い一本道が続く。人々はなるべく日陰を歩くようにしていた、暑さに身を焦がされ、魂が抜けたように歩いていたら、秋葉原という標識のたった駅に付いた。言わずと知れたオタクの聖地、前々から少し興味があったから寄ってみることにした。

数時間後。

「迷った」

駅から電気街に行く途中で、見事に迷い、疲れ果ててしまった。汗がゆっくり体を伝って、アスファルトの地面に染み込む。額の汗をハンカチで拭い、近くの若林公園という、公園で休む事にした。日陰があるベンチに座る。

携帯を開き今日の気温及び天気を調べた。

「最高気温３５度、一週間は晴れか。ヤレヤレ地球温暖化は深刻だな。」

公園は風通り良く木が揺らめくたびに風が自分の体に当たり涼しかった。しばらくして、公園の入口に人が倒れているのが見えた、長袖長ズボンしかも熱を吸収し易い黒色。髪はショートヘアで仰向けに倒れていた為、すぐに女の子であることがわかった。後、気になるのは眼帯だった、怪我でもしているのだろうか。とりあえず声を掛けた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、問題ない」

最近ネットで流行った流行語を使い、女の子は答えたが仰向けに倒れたまますごい汗で、起きる気配がまったくない。

「あーもう大丈夫じゃない、大問題だ。涼しい場所に連れて行くからそこで休め」

「くぅ…頼む」

若干呼吸が荒い女の子を抱きかかえて近くの、ゲームセンターに入ったそれなりに涼しい。女の子をゲームセンターの中のベンチに座わらせる。しばらくすると、目を開いて立ち上がった。

「感謝するぞ、愚民よ我を助けた事誇りに思うがいい。」

ああ、こいつ厨二病だ。激しく関わりたくない、僕は足早にその場を立ち去ろとするが服を引っ張られた。勘弁してくれ。

「あの…い、いや貴様名をなんと言う？」

「成瀬東」
「なるほど、良い名だな」
意外にまともな質問だ、喋り方は厨二病患者だが。
「私の名前は、ナイトシークエスだ」
うわ、絶対違う。絶対偽名だ、ヤレヤレこういう人間は初めてだ、どうしたらいいんだ？　僕はとりあえず帰りたかった。
「待て、アズよ」
いきなりあだ名ですか、本当に勘弁してくれと思いつつも、振り返ってしまう。
「我は貴様に、その…だな…礼がしたい、だから少し付き合え。」
「礼？　礼なんて僕はいらないよ」
「いや、させろ　させて下さい！」
いきなり敬語になった、まぁここまで言われたらさすがに僕も引く事はないだろうと思い、クエスという偽名の少女にしばらく付き合うことにした。
クエスは僕の頼みなら今日は何でも聞くと言うが、今はとりあえずゲームセンターに来ているので何かワンプレイ奢ってもらうことにした。
アーケードゲームの格闘ゲームで今はやっぱり熱いのは、ブラックブルーだ。ブラックブルーとは初心者でものめり込み易い操作システムやストーリーの面白さ、キャラの個性を生かした多種多彩な自由戦闘ができる、超人気２Ｄ格闘ゲームである。人気なだけあって台の乱入率も非常に高い、ここは秋葉原ということもあって上級者が互いに腕を競いあっている。
「おい、あの眼帯の子レジェンドじゃないか？」
見知らぬオタク達が騒ぎだす。クエスはどうやら有名人のようだ。
「愚民たちよ！　台を開けるのだ！」
「はい！」
ブラックブルーをプレイしていたオタク達が揃って返事をする。
その光景はかなりシュールで全員揃った動きで台を開けた。

「クエス、なんかこいつらの弱みでも？」
「いや、我はここで最強なだけだ。ここでは、強者が絶対であり弱者は強者に服従しなければならない」
秋葉原にはそんな掟があったのか、恐ろしいな。僕はそんなどうでもいい事をすぐに忘れプレイする、使用キャラクターは「カザマ」
さぁ始めよう、だが秋葉原の格闘ゲームの本質は乱入だ、乱入者が来なければつまらない。そこで僕はクエスに相手を頼んだ。
「おい、クエス相手頼む」
場が一瞬静まり返り、そしてまた一気にざわめきだす。
「おい、あいつ正気か？」
「相手はレジェンドだぞ、かなうわけない」
オタク達の鬱陶しい声、彼らの様子から察するにクエスは相当強い。楽しめそうだ。
「我に挑んだ事を後悔するんだな、アズ」
「使用キャラクターはラダナか、悪いが最初から僕は本気でやらせて貰う」

カズマＶＳラダナ　勝負は三本先取
ラウンド１　ファイト。

「おい、レジェンド押されてないか？」
「まさか、本気は三本目からだろ」
「三本目が始まるぞ！」

数分後三本目の勝負、僕のカズマの勝利が決まったそれもアブストラクトフィニッシュと言う、超必殺技で。
「私が負けた！　なんで！　どうして！」
「クエスは十分強かったよ」
「何が強かったよだよ！　三本パーフェクトじゃないか！　しかもアブストラクトフィニッシュって」

周りで見物していたオタク達が驚いた表情で僕を見る、今まで自分たちが慕っていたレジェンドが負けた、クエスが負けた。泣き出す奴もいれば、僕を憎しみの表情で見る奴もいる。
「そんな、レジェンドが負けた」
「あいつ何者だ？」
「レジェンド…」
クエスが地面にガックリと膝を落とし僕を見る、強者は絶対の掟があるのを僕は思い出す。
「我の負けだ、煮るなり焼くなり好きにしろ。」
「別にどうもしないけど…いや、じゃ僕にもう少し付き合ってくれる？」
クエスは一瞬キョトンとした顔で僕を見てから立ち上がる、そして僕が連れて行ったのは、プリクラコーナー。色んなプリクラが並ぶ中コスプレ専用機を選び、クエスにコスプレさせる。
「着替え終わったぞ」
「おお、コスプレだ、この町に来てからコスプレ一度も見てなかったんだよね」
クエスが選んだコスプレの服は某電子のアイドルのコスプレ。分かる人は分かるよねー！
オタク達が一瞬にして集る、この光景もまたシュール。だがクエスはいま完全に僕が独占状態、オタク達の目が怖い。
「くそう！　リア充め！」
「俺達のレジェンドになんてことを！」
「けしからん！　いいぞーもっとやれ。」
「この中にカメラ小僧はいないのか！」
なんと言うかオタクが怖くなった、この人達未来に生きてるなぁ。
プリクラの撮影ポイントに入る。照明の光が若干眩しい。
「クエス、プリクラ初めて？」
「初めてだ、友達とかいないから」
なんと言うか不憫な子だな、眼帯とれよ

「クエス笑って！」
「え？　こうか？」
写真がしっかり撮られラクガキコーナーへ移る、ラクガキコーナーで顔にいたずら。
「くはははは、貴様の顔などこうしてくれる！」
「あーやったなぁー、ならクエスはこうだ！　あはははは」
意外にクエスも女の子らしく笑える、今気づいたクエスかなり可愛い。
「最後の一枚だ」
「最後の一枚だね、ラクガキせずにこのままにしておこう」
「なぜだ？」
「クエスが可愛いく写ってるから」
クエスの顔が赤くなり耳まで、真っ赤になる。ほう、こいつ意外に照れ屋なのか。
「な、なにを　私が、可愛い訳ないわよ」
「喋り方が普通に戻ってる」
「あ～もう、貴様は黙っていろ」
なぜか、怒られた。まぁいいだろう今日はかなり充実した時間が久しぶりに過ごせたし、楽しかった。
クエスと二人でゲームセンターの外に出る、大分時間が経ってしまっていて日はとっくに沈みかけ、空は紫色に染まっていた、車の騒音が車道から聞こえる、どうしてもあの日の事が忘れられない。いや、きっと忘れてはいけないだろう。
「気分でも悪いのかアズ？」
「いや、なんでもないよ僕は平気」
クエスが気を使ってくれた、ちょっと嬉しい。
「貴様、夏休みは暇か？」
「まぁ暇だよまだ高校二年だし」
「なら我らが、サークルとやらに明日くると良い！」
「へぇクエスはサークルに入ってるんだ、どんなサークル？」

クエスは眼帯をとり怪しいポージングをとりながら語りだす。眼帯が外れて見えた瞳は青く光っていた。
「我がサークルの名はアンデッドヒーローズ、普段は同人誌や同人ゲームを作っているがそれは世を忍ぶ仮の姿！　本当の目的はこの東京にはびこる怪事件を解決する英雄の集まりだ！」
「なるほど、わからん」
適当な返事をする、だがどうせ夏休みは暇だから、顔を出して見るのもいいかもしれない。
「まぁ楽しめそうだから明日覗いてみるよ！」
「ならば貴様にこれを渡そう」
そう言って、クエスは僕の手に何かを手渡した。地図のようだ、分かりにくい字が汚い、ものすごく見ずらい。
「じゃまた明日」
「フフフ、待っているぞ我が同士よ」
日が完全に沈み、夜になる。この世に神様なんていない、だから人生は楽しい、たとえどんなに辛い事があろうと、自力で乗り越えた先にきっと幸せは待ってるんだ。こんな事を家に帰りながら考える僕を人は夢の見過ぎと、笑うかも知れないだけど、僕は今日とっても楽しかった。
家に着く、今日はもう疲れたから風呂に入って早く寝る事にした。繰り返し思う、今日は楽しかった。

夢の中は自由だ、楽しくて、自分の思うように物を変えたり出来る。故に行き過ぎた夢を見る事もある、だけど朝に起きれば全てはなかった事。全てはチャラになるのだ。さぁ今日はどんな夢を見れるかな、今日会ったクエスの夢、明日の想像、どちらも楽しい夢には変わりないだろう。
ポケットの内側に何か固い物が入ってる、取り出して強く握ると

するどく光るナイフの様な刃がでる、今自分が立ってるのは暗い夜道で、人の気配がまったくしない、右手でナイフを持って走り出す、暗い道の先に人がいる。右手が勝手に動いて、一瞬で何かを切った感触全身に伝わる。いい、気持ちいい、そうだ次はあいつ！　あいつを！

「うわぁぁ！…夢か、最近こんな夢ばかりだな、最近体がだるいのは夢のせいか、もっと楽しい夢がいいのに。」
また静かに狭いワンルームの一室で眠る、高速道路の車の騒音が部屋に漂う。

僕と幸せ（後書き）

記念すべき二作目です。これからも頑張っていきます。

些細な事も人の悲しみも（前書き）

この物語を読むに時に読者の皆様に気をつけて頂きたい、事柄がある。この物語はアブストラクト、つまり抽象的な日常を描いた物語。いまある常識を全て捨て去り読むことを、強く推薦する。また残酷極まりない行動をとる主人公たちが許せない方々は読むことをオススメできない。

この物語に出てくる人物たちは少なからず精神的におかしく、読者の皆様に悪影響を及ぼす可能性もある、それでも「大丈夫だ、問題ない」という方はアブストラクトデイズをお楽しみ頂ければ幸いである。

※横にして読んで下さい！

些細な事も人の悲しみも

私は何を思い出しているのだろう、小さな頃の記憶だ、私がまだ五歳の時の記憶。隣には小さな男の子がいて私のことを呼んでいる。歳は一つしか違わないけど、とっても小さくて可愛らしい。

「かなねぇちゃん！かなねぇちゃん！」

「なぁに？アズ？」

「ギルティエアやろうよ！」

「うん、いいよ」

小さい頃、私とアズはよく遊んだ。彼はその頃からゲームが大好きで私がいつも相手になって遊んだあげた。

そして、その時から約十年が立ち、彼の両親が他界し家に引き取られ久方ぶりに再会した時、アズは私の事を余り覚えてはいなかった。遊んだ記憶はもはや、彼にとっては、おぼろげで何故か私は悲しい気持ちに、包まれていた。

ねぇアズ、お姉ちゃんは心配だよ、アズのお父さんお母さん死んじゃって、家に引き取られて約二年で家を飛び出して、今どうしてるの？

「加奈子、ボール片付けて」

「あ、うん」

「さっき何か考え事してたの？」

「いやちょっとボーッとしてただけ。」

ソフトボール部の活動が終わって、日が沈みかける空、私はグラウンドの片隅で、ボールの片付けを始める、空はすでに紫色だ。

ボールを専用のカゴに全て戻し、倉庫へ戻した所で、集合の合図が聞こえる。みんな一つの場所に集まり、顧問の先生の話しをしっかり聞く。

「大会近いから、お前ら気合い入れろよ！」

「はい！」

全員が揃った返事をしたところで、今日は解散、私はユニフォームをスクールバックきちんと畳んでしまい、校門を出た。出てすぐ右に曲がると、バス停に着く、バス停からバスに乗ると、家へはすぐに到着する。何人か同じルートだ、その何人かが話しをし始める。

「ねぇ、聞いた？　最近の通り魔の話し」

「ああ、ニュースでやってたもう十件目でしょう、怖いよね」

「殺された人、皆喉を切られてるんだよね。最近じゃジャックザリッパーって言われてるらしいよ」

物騒な話しだ、毎晩毎晩夜中に必ずと言っていい程、通り魔が現れて人を一瞬で殺す、最近は良くない噂や事件が多い気がする。

「でさ、その通り魔なんと目撃者がついに出たんだよ！」

「マジィ？　どんな奴な訳、犯人？」

「ああ、確か赤毛で身長は中学生っぽいって話しだよ」

身長が中学生みたいで、赤毛、私はまさかと思う、けど私は彼がそんな人間じゃないのを誰よりも知ってる、そうアズはそんな人間じゃない。辛い出来事を乗り越え今必死に生きてる、正しい人間だ。アズ、本当にお姉ちゃんは心配だよ。

うるさい目覚まし時計が、轟音をたてる、こんな目覚まし買うんじゃなかった。今更後悔しても遅いと思いながら、目覚まし時計を止める為、布団から、だるい体を起こして床に置いた目覚まし時計を蹴る。ガラスが割れる用な音をたてて、目覚まし時計は止まった。

「るっせぇーよ、この糞目覚ましが」

うるさいのは嫌いだ、大嫌いだ、何故僕がうるさいのが嫌いかと言うと、それは夏休みに入るちょっと前の日の事、期末テストが帰って来た時の事だった。

クラスの連中が授業中にも関わらず、うるさく喋り出すから、授業の内容が全然頭に入らなかったのだ、無論騒がしい奴は赤点だっ

た。僕は赤点こそ逃れられたが、成績はかなり下がっしまった。ヤレヤレまったく困ったものだ。
僕は、朝食を済ませいつも通り私服に着替えた。そして昨日の出来事を思い出す、クエスと言う可愛いらしくも厨二病真っ盛りの少女に出会った事。思い出すと頭が痛い、今日も彼女に会わなければならない、昨日自分はどうして、面倒くさいとわかりながら、「じゃまた明日」なんて言葉を軽く吐いたのか。今になってまた後悔し出す自分が情けない。
僕は落胆した気分から、しばらく経ってノートパソコンを起動した。

正和「ういーす」

ペルシャン「こんにちは、正和さん」

正和「あれ、今日は奈落さんいない？」

ペルシャン「来てないみたいですね」

正和「まさかジャックザリッパーに…」

ペルシャン「まさか、縁起でもないw」

正和「ですよねー」

ペルシャン「でもジャックザリッパー事件、十一人目の被害者が出たみたいですね」

正和「それは初耳！　でも正直ジザリには飽きました。」

ペルシャン「ジザリ？ああ、略称ですね？」

正和「はい、他にもっと物騒な事件はないんでしょうか？」

ペルシャン「物騒な事件を願うな！　まぁ、事件て程じゃありませんが、面白い噂があります。」

正和「是非聞きたいでござる！」

ペルシャン「美少女のオタク狩りがいるらしいです。証言によると対象を見つけると、人気のない所に連れ込み」

正和「人気のない…ごくり、俺のマグナムがビンビンだぜ！」

ペルシャン「対象を半殺しにして、金品を強奪するそうです。犯人像は眼帯をしていて、熱の吸収がされやすい黒の長袖長ズボンだそうです。」

正和「…へぇ怖いですね～、俺のマグナムが萎えてしまった」

ペルシャン「再勃♂不能の呪文C．C」

チャットの画面を閉じる、時刻は午前十一時を指していた、いまから家を出れば丁度いい時刻に目的地に着くだろう。昨日クエスに渡された、地図を片手に家を出る、エレベーターで下に降りてエントランスを通り過ぎるとまた、暑い日差しに体が焼かれる、今日の

気温は昨日よりも高い。
　気温の高さで思い出した、昨日のクエスとの出来事、最初あった時クエスはこの暑さでぶっ倒れていた。今度はちゃんと倒れずにいられるだろうか、まぁ心配しても今クエスはいない早く目的地へ行こう。目的地は若林公園を通り過ぎて、更に数メートル進んだ先にある。
　昨日秋葉原にたどり着いたかすかな記憶を頼りに道を進む、数十分後、昨日みた、秋葉原の駅の標識があった。
　僕は時刻を確認する、まだ時間は余っていた、せっかくなので、そこら辺りを散策することした、お決まりの痛い広告や看板、等身大フィギュア、少しの散策で色々な物が見れた。やはりこの街はいい、未来に生きている活気を感じることができる。最後にせっかくだからゲームセンターに行った。
「お、やってるやってる」
　昨日の面子と変わらない、ここまさかこのオタク達に独占されてないか？まぁどうでもいい事だ。
「あ、レジェンドを倒した少年！」
オタクの一人が僕に気がつく、それに続くように周りのオタク達も僕に気づいた、皆僕を見てる、目つきが怖い。
「あのーもしかして僕、邪魔者？」
「当たり前だ！」
オタク達が揃って返事をした、どうやらクエスを打ち負かした、僕は嫌われ者のようだ。だがある事を思い出す、掟だ。ここには恐ろしい掟がある、強者は絶対（ゲーム内で）ならばやることは一つだ。
「こいよ、キモオタども相手してやるよ！」
「上等だ！　全員戦闘体制！　並べ！」
　この息がピッタリなオタク達、本当に見ててシュールだ。さて使うキャラクターは今日はＡ－１１を使おう。
　ここでキャラクターの特性について少しだけ解説しよう、昨日使用した「カズマ」はカウンターを取る事によってからの、コンボを

得意とする人向けのキャラクターだ、だが今日使うＡ－１１というキャラクターは遠距離を得意とする上に、自分から攻めて行く事を好む人向けのキャラクターだ。
　昨日の戦闘をみていたオタク達は僕の未知数の攻撃、コンボの多さによって完全に翻弄されるだろう。さぁはじめよう。
　数十分後、全員に僕のストレート勝ちを叩きつけてやった、それもアブストラクトフィニッシュで。
「ひでぶー！」
「たわば！」
「ぐえへあ！」
撃破されるたびに、オタク達は台から吹っ飛ぶ。こいつら頭大丈夫か？
「さぁ僕の勝ちだよ、みんな文句はないよね。」
オタク達は無言のまま渋々頷いた、その後満足した僕は、ゲームセンターの外へ出て、路上裏へ向かった。
　人気の少ない路上裏だ、若干汚くて正直臭くもあった、アンモニア臭がすごい。
「嫌！止めてぇぇ！」
　聞き覚えのある声色、だがその声は悲鳴だ。紛れもなく、危険に晒されて出る女性の悲鳴、僕はすぐに悲鳴の聞こえた場所へ向かった。複雑に入り組んだ路上裏の先にクエスが三人の男に囲まれていた。その三人は、オタクだった。間違いなく、ものすごく気持ち悪い不潔なオタクだった。
「オタクにも色々いるけどよ、君達みたいなのは最低の部類に入るよ、三人で女の子襲って楽しい？」
「う、うるさい」
「そ、そうだ」
「こ、この子が悪いんだ」
　挙動不審な仕草と声で答えるキモオタ三人、キモオタ三人衆と名付けよう。まぁ一応殴り合う前に事情を聞いておこう。

「その子がなにした？　お前らに？」
「こ、この子は我々に以前」
「お、オタク狩りと呼ばれる」
「こ、行為をしたのである」
　また挙動不審な仕草と声でキモオタ三人衆は答えた、そう言えば今朝チャットで「美少女によるオタク狩り」と言う話しを聞いたが、まさか…クエス？見た目、容姿は証言と一致。嘘だろ、ヤレヤレだが仕返しで襲うこいつらもどうかと思う。
「キモオタ三人衆、こいよ僕が相手してやるよ。」
「き、貴様１人でなにが…」
「で、できるんだ…」
　キモオタ三人衆はカバンに刺さっていた、固く丸められたポスターを構える、やる気満々だな。
　自分のポケットに何か固い物が入ってる。
　数秒後、キモオタ三人衆が持っていたポスターがバラバラになる、自分が何をしたか僕は理解できなかった。なぜ右手にナイフなんて持っているのだろう。
「ひ、ひぃ！」
「あ、うう！」
「お、覚えていろ！」
　キモオタ三人衆が捨て台詞を吐いて逃げて行く、何だろ夢で見たあの感覚に似てる、クエスが立ち上がってこちらに来る。
「貴様に助けられるのは二回目だな、また…その…礼をしなくては」
　聞いて呆れる台詞だ、僕はクエスの肩を強く掴み彼女の目をしっかり見る。
「何で、こんなことをしたんだ！」
「貴様には関係ない」
　クエスは震えた声でと素っ気ない態度で、答えた。何か深い事情があるようだが、それ以上詮索はできなかった、クエスが潤んだ瞳を見たら何も聞けなかった。本当はもっと言ってやりたい事が山ほ

どあったが、言う気にはならなかった、なぜそんな辛そうな顔をするんだろう。
「礼、するから着いて来い」
「礼なんていらない」
昨日と同じような会話、僕が礼なんていらないと言った瞬間、空腹を知らせる腹から聞こえる独特の音が鳴った。
「我の好意を黙って受け取れ、昼飯奢るから」
「じゃあ、ワックがいい、ちなみにメガワックセットで」
「いきなり遠慮なくなったな」
ワックとはちょっと変わったマスコットキャラクターが有名な、ファーストフード店である。ネットなどではよくコマーシャルをいじったＭＡＤなる物がよく作られてる、別名マスコットキャラクターの総称は教祖。
路上裏を抜けて、駅前広場まで行くそこにワックがある数分後、僕とクエスはワックに到着、僕は席取り、クエスは、メニューを頼みに言った。
クエスがトレイを運び机の上に乗せる、その時一瞬目を疑う光景がトレイに広がっていた。
「僕、メガワックセットっていったよね！　何でハッピーセットなんだよ！」
「…その…つい癖で」
どんな癖だよ、よく見るとクエスもハッピーセットだった、ハッピーセットの玩具でも集めているのだろうか。その歳にもなってハッピーセットは正直おかしいと思う。
「アズ今日は、我がサークルに来る予定か？」
「まぁ、暇だったから行こうかと思ってここまで来た。」
ポテトとチキンナゲットをほおばりながら、会話。周りから見たら汚い限りだろう。クエスの頬にナゲット用のバーベキューソースがべっとりついている、気づいてくれ。
僕はポテトとチキンナゲットを食べ終わり、玩具の袋を開けよう

とした時だった。
「待て」
クエスが僕の手を抑え、玩具の袋を開けようとするのを阻止した。
「なんだよ」
「玩具はくれ」
この瞬間とことんお子様なのが分かった、クエス、君はとことんお子様な上、厨二病なんだね。そういえば歳はいくつなんだろう。
「まぁいいけど、クエス歳は？」
「十六歳だ」
なる程、と言う事は高校生か。
「ちなみに高校は行ってないぞ」
嘘ぉ！中卒かよ！まじすか、そんな人間初めて見た、しかも東京都で、めったにいないんじゃないだろか。
「なんで行かないんだ？」
「馬鹿共と馴れ合いを楽しむ余裕など我にはない、我は孤独を好む。」
また辛そうな顔をする、目が潤んでいる、さっきと同じだ、だが何か引っかかる…そうだ僕はその辛そうな顔がいったいどういう時にするか知ってるぞ、知ってる。
僕はその辛そうな顔を以前していたのだから。これは確認しなくてはならない、放って置いてはいけない。
「本当はそんな理由じゃないだろ？」
「…」
「何かあるんじゃないか、普通ならそんな辛そうな顔はしない」
「…」
クエスは無言でうつむいて、答えない。仕方ないか、仕方ないことだ。
「言いたくなったら言えばいい」
「…え？」
「クエスが言いたくなったら言えばいいんだよ、言うのも辛い事な

んじゃないか？それって」
　クエスは黙ったまま泣き出したそして、しばらくしてから頷いた。それはまるで初めて心の痛い所をつかれて、泣き出す小さな子供のようだった。僕の腹の中では彼女が本当は何に辛くて泣いてしまっているかなんて、分からない。だけどその辛くて悲しそうな顔は僕が、両親を失った時とまったく同じような表情だ。彼女もきっと似たような体験をしたに違いない。
　昼飯タイムが終了、僕はまだ泣いているクエスを慰めながら、ワックを後にした。早く泣き止んでくれ、これじゃ周りから見たら僕が彼女を泣かしたように見えてしまう。
「そうだ、案内してくれよクエスお前のサークルが活動してる場所に」
「うぐ…ひっく…分かった」
しゃっくり混じりの鳴き声で返事をしたクエス、良かったまだ元気そうで。
「あと、ほっぺにソースついてるよ」
「あ、うん」
　クエスはポケットからティッシュを取り出して、自分の頬のソースを拭き取った。
　しばらくクエスが道を案内してくれて、秋葉原の電気街の離れの方へ出る、相変わらずの交通量で大通り沿いの信号待ちの人混みはすごい人数だった。人混みに慣れていない僕は道行く人にのまれないよう、ぶつからないようにするのが、精一杯だった。
　クエスが大きなビルを指差す、そのビルは周りの建物と大きさと比にならないくらい高かった。クエスはそのビルの中に入って行く、僕は少し遅れてからクエスに続いた。
　クエスはエレベーターに乗る、そして最上階のボタンを押す、僕はエレベーターの中の端の方から、ガラス窓の向こう側を眺めていた、ものすごい速さでエレベーターは上昇していく、周りの風景が一望出来る高さまで来る。

真下に見える人々は米粒よりも小さく見える、そんな高さまで来てようやく最上階だ、エレベーターをでると玄関のようなドアが現れた。
クエスはそのドアを鍵を使って開ける、そして僕が暮らしている狭いワンルームとは比べ物にならないくらい広い部屋があった。
「すごいな、靴を脱いでっと」
「今日は誰も来てないか、ほら貴様にもくれてやるよ」
そう言ってクエスは、鍵を僕に投げ渡した。
「これって合い鍵？」
「そうだ、仲間は全員持ってる本来貴様の様な奴にはやらないが、特別だからな」
特別か、仲間にされたって事でいいのかな？クエスは仲間がいるのか、クエスの仲間ってどんな人かな。
「我々の目的は昔からある東京都の怪奇、怪事件について調査し解決することだ。」
「昨日聞いたよ、それ」
クエスはつまらなそうな、膨れた顔をする、しかしまだ説明は続く。
「最近起きてる事件としてまず、注目してもらいたいのが、吸血鬼事件だ」
「聞いた事ないです！」
クエスはそれもその筈、というと嘘とは到底思えない、事件に関係する説明を行った、吸血鬼事件は警察署が極秘に調査を行っている事件でマスコミや一般のメディアなどには一切情報が漏れないようにしてるとか。
「まてよ、なんで極秘なのにクエスが知ってる？」
「サークル内に、ハッカーがいるから」
分かりやすくて、ものすごく助かる説明だ。正直もう帰りたい。
「アズ、この街ら好きか？」
「まぁ多少は」

クエスはニヤリと笑い眼帯を外し青い瞳で僕を見た、この行動がなにを意味するかは分からない。クエスは部屋の窓辺に立って、溜め息を一つ。
「我はこの街をもっと住みやすくしたい、皆が安心して誰も犠牲の出ない街にしたいんだ」
「へぇ、でも暇人の集まりで何かできるの？」
単純な疑問をクエスに投げかける、やろうとすることは素晴らしいけど、今まで何が出来たか聞いておきたい。
「確かに暇人の集まりだ、だが只の暇人ではない皆、秀でた能力がある、明日全員に集合をかける、正午にはまた来い」
「活動内容は大体分かった、吸血鬼事件ね、その話しが本当なら怖いしな」
「ああ、帰りは気をつけろよ、最近はジャックザリッパーが出るらしいから。」
僕は今の所、彼女の話しは半信半疑と言ったところだ、半分疑いの部分はもちろん話し自体聞いたことがないからだ、半分信じている部分はとても作り話しとは思えない事件の説明、それとこの部屋だ、並大抵の人間が使えるような部屋じゃない、資産家や大富豪が手を伸ばしてようやく手に入れられる程の部屋、これを使っていると言う事。
僕は玄関で靴を履く、そして立ち上がろとした時、柔らかくて暖かい物が背中に当たった、クエスが僕の背中に抱きついてきのだ。
「ありがとう」
小さな声だった、それだけ言うとクエスは恥ずかしそうにして、部屋の奥へ行ってしまった。
初めて彼女の素直な気持ちを感じた気がした、瞬間だった。

些細な事も人の悲しみも（後書き）

二話目です、話しの構図を練るのって疲れますね、だけど完成させた時の達成感は病みつきになります、そんなデッド星奈でした。

アンデッド（前書き）

この物語を読むに時に読者の皆様に気をつけて頂きたい、事柄がある。この物語はアブストラクト、つまり抽象的な日常を描いた物語。いまある常識を全て捨て去り読むことを、強く推薦する。また残酷極まりない行動をとる主人公たちが許せない方々は読むことをオススメできない。

　この物語に出てくる人物たちは少なからず精神的におかしく、読者の皆様に悪影響を及ぼす可能性もある、それでも「大丈夫だ、問題ない」という方はアブストラクトデイズをお楽しみ頂ければ幸いである。

※横にして読んで下さい！

アンデッド

夕暮れ時、うるさい蝉の合唱が街に響き渡る、僕は日が暮れて夜になる前に家の玄関に到着した。家の中の状態は朝と全然変わらない、僕は靴を脱いで狭いワンルームの冷蔵庫を開けて、インスタントカップラーメンを取り出す。普通インスタントカップラーメンは冷蔵庫では保存しないが、僕は物をそのまま放置するのが余り好きではない為、冷蔵庫に入れてる。

蝉の合唱が締め切った窓越しに部屋の中へ響き渡る、僕はやかんに水を入れる、そしてコンロで加熱。中の水が沸点に到達する、やかんの注ぎ口から、沸騰した水の湯気が出る。

カップラーメンの蓋を半分まで開け、お約束の如くお湯を注ぎ三分待機。僕は割り箸を取り出し、カップラーメンを小さなテーブルへ運び、割り箸を割る、割った割り箸の片方を右手に、もう片方を左手で持つとテーブルを割り箸で叩く。

「テーブルドラム、なんつって」

一人でカップラーメンを待つ時によくやる、どうでもいい行動。他人がいる時にやると確実に変人扱いされるから、あんまりオススメしない。

「三分たった」

僕は、カップラーメンの蓋を全開にするのと、同時にテレビのリモコンを手にとって、スイッチを入れた。テレビの映像に映るニュースのアナウンサーは誰も頼んでないのに話し出す。

「今日、午前二時頃、またも通り魔が出没しました。」

最近通り魔が有名だ、クエスのサークル、確かアンデッドヒーローズだったかな、東京都の安全をどうとか言ってだけど、この事件は対象にしてないのかな？

「吸血鬼ね、吸血鬼…」

クエスが今対象にしてるのは見たことも、聞いたこともない吸血

鬼の事件だった。クエス曰わく、吸血鬼は対象人物の血を全て吸い上げて殺してしまうらしい、吸血鬼は血を吸わなくても生きていけるが、血を吸うという欲求は、彼らが進化の過程での間違いか、ある時当たり前のように、血が欲しくなってしまうらしい。

そうなったらもう止めようがない、だが無論放置する訳にも行かないから、奴らを倒すしかない。非常識と言えば非常識だろう、だがクエスのサークルは何度もやってきた事らしい。東京都に残る吸血鬼はあと残り少ないとクエスは言っていた。

「麺伸びちゃった、いいや味に変わりないし。」

僕は伸びたラーメンを口で吸っていく、具がようやく見え始めた頃には、外は真っ暗闇になっていた。

「ふぅ、食いきった…寝るか、明日もあの場所にいかなきゃだし。」

僕はクエスから、もらった合い鍵がポケットに入ってるのを思い出し、ポケットから取り出しテーブルの上に置いた。今日は疲れたもう寝よう。

ツライ、ツライヨナ、アナヲウメルニハ、ウバウシカナイ。

お前は誰だ。

オレハ、オマエサ、ワスレチマッタカ？　オマエハ、オレニイツモ、ソンヲオシツケルノニ。

なんの事を言ってるんだ、悪いな僕は昔のことなんて覚えちゃいない。

イヤ、オボエテルサ、オレヲウミダシタノハ、オマエガ…

気味の悪い声がノイズにかき消された、頭が痛い。僕は周りを見る、よく夢に出てくる暗い人気のない、夜道。

ポケットに何か入ってる、まさかまた、予感は的中した、ナイフだ。

後は同じ、全部同じ、誰がを見つけたら……。

「うわぁ！またこの夢かよ、勘弁してくれ。」
布団から上半身だけを絶叫と共に起こす、また体がだるい、締め切った窓のカーテンから朝日が差し込みハウスダストを写し出す。僕はゆっくりと立ち上がり、カーテンを全開にし窓を開けて部屋の空気を入れ換えた。
ふと、布団の方を振り返ると、加奈子姉さんが布団で寝ていた…。まて落ち着け、振り返り方が悪いから異空間を見てしまったんだ、落ち着いてもう一度、振り返えるんだ。
「これが現実空間だぁぁぁ！」
マンションで朝から絶叫する少年がそこにいた、ていうか僕だった。
「ん～？アズ起きた？」
起きました、あなたのおかげで絶叫もしました。
「何で僕の部屋にいるの？」
「心配になって来ちゃった☆」
笑顔が眩しい、だがそれと同時に腹立たしくもある、人の家にかってに入るなよ、まったく。
「夜中に家を抜け出して、アズのところに遙々来たお姉ちゃんに、そんな怖い顔向けないでよ、大体アズが鍵を掛けないのが悪いんじゃん」
「それ以前に人の家に勝手に上がり込むのは非常識だと思うが」
僕が正論を返すと、かなねぇは顔を膨らまして、そっぽ向いてしまった、困った姉だ。
だが、朝食はかなねぇが作ってくれた。
「おいしい？」
「ああうまい、ひさびさだな、かなねぇの手料理は」
「毎日来て作ってあげようか？」
僕は首を思いっきり横に振って答えた、かなねぇは捨てられたら子犬の様にしょんぼりとした顔になる。朝食を食べながら、かなね

ぇが質問してきた。
「ねぇ、アズ最近夜中に外を歩いたりしてない？」
質問をした、かなねぇの顔は少し眉間にシワがよっていた。
「してないよ、夜中はいつも寝てる」
「そう、ならいいんだけど」
最近の夜はなにかと物騒だから出歩かない、そんなのは当たり前の事だ。当たり前と言えば、警察はまだ通り魔を捕まえられていない、普通なら夜中のパトロールを増やしても、おかしくない筈だ、何故増やさないんだろう、増やせばもっと沢山の情報量が手に入るはずなのに。
そんな事を考えていたら、朝食を食べ終わり、食器はかなねぇが洗ってくれた。朝のいつもの日課のでノートパソコンを開きチャット画面を起動、かなねぇが覗き込んでくる。

正和「やぁ諸君」
奈落「た、大変だぁ！」
ペルシャン「どうした！？」
正和「落ち着け、そして深呼吸だ」
奈落「道路封鎖だぁ！事件があったらしくて、いつもの仕事場に向かうルートが、なんてこったぁ！」
正和「お気の毒に」
ペルシャン「事件の詳細は？」

奈落「わからないです、でもブルーシートで覆われてる辺り、多分殺人かな？」

ペルシャン「ジザリの被害者？」

正和「ひぇぇジザリまたジザリか」

奈落「ジザリではないです、ジザリだったら今頃マスコミが殺到してます、マスコミどころか警察官の人の方が多い感じで、なんかやばそうなんでもう行きます。」

ペルシャン「お気をつけて」

チャット画面を閉じる、かなねぇがテレビのスイッチをいれると同時に、蝉のうるさい合唱が始まった。相変わらず飽きもせずどうして蝉たちは鳴けるんだと、呆れた感じで誰かに質問したくなるほど、うるさい。

「さっきのチャットの道路封鎖の事ニュースではやってないね」

かなねぇがチャットをどこまで見ていたか分かる言葉を吐く。

「また今日もジザリの方か、さすがに飽きた。」

今のところ、この事件は一日一人殺すペースなのが分かる、こんな事をする人間の気が知れない。

「あ、もうこんな時間だ、部活遅れちゃうじゃあね、アズ」

「おう、気をつけろよ」

時刻は、午前七時を刺していた。僕は、かなねぇが家を完全に出たのを確認し、昨日テーブルに置いた合い鍵を取る、そして最近あまり使ってない携帯電話を開いた。

「メール来てる、全部かなねぇからだ　ちょっと悪い事しちゃったな」
受信メールは十件を超えていた、全部僕を気づかった文章のメール、後でしっかり返信してあげないとな、かなねぇが可哀想だ。
さて僕もそろそろ行くか、家を出て鍵をちゃんと閉める、いつも通りの夏らしい外の暑さにも慣れてきた、アスファルトの地面から陽炎が立ち昇っている。
秋葉原に約数十分、そこからさらに数十分ビルの密集地帯を歩くと、やたら高いビルに行き当たる。その高いビルの最上階が、クエスが居るアンデッドヒーローズの活動場所。ビルの中はかなり空調が良い、涼しい。
僕はエレベーターに乗り最上階のボタンを押して、エレベーターの轟音に揺られながら目をつぶって待つ。
到着を知らせるベルの音がやがてなり、目を開けてエレベーターの外へ出て、合い鍵を使い、目の前のやたら広々とした、豪華な部屋へ入る。
中に入ると昨日はいなかったメイドさんが出迎えてくれた、驚いたこのメイドさん本物だ！
「お待ちしておりました、成瀬様。こちらで、クエス様がお待ちです。」
メイドさんが案内してくれる、案内された部屋、そこにはクエスとツインテールのメガネをかけた女子高校生らしき人物とスーツを着た大人の女性がいた。
「きたか、貴様を皆に紹介しよう、格ゲーで私に勝った、成瀬東だ。今日から諸君らの仲間として、東京都にはびこる怪事件を解決するアンデッドヒーローズの一員だ。」
クエスが大変適当な僕の紹介をする、僕の後ろに立っていた、メイドさんが前に出てきて丁寧な一礼をし、自己紹介を始めた。
「私は、桐生奈良と申します。」
「よろしく奈良さん」

なかなか礼儀正しい人だ、それに結構可愛い。
次にスーツ着た女性が口を開いた。
「佐藤萌美だ、主に戦闘を担当してる」
「戦闘って吸血鬼とかと？」
「そうだ。」
真面目そうな人が吸血鬼の存在を認めてる、クエス少しでも疑ってすいませんでした。
次にツインテールの人が自己紹介をした。
「雪村楓です、楓ちゃんて呼んでね、私は主に情報収集だよ」
全員各々の自己紹介を聞き終えて思った、僕以外女の子、それも極上に可愛いじゃないか！！　生まれて十七年、僕はずっと自分の人生は谷しかないと思ってた、不幸だと思ってた。
だけど、今ようやく山、つまりは幸福の頂点にいるような気がした。やったこれが噂のモテキ！　人生山あり谷ありだよ、あれ使い方間違えた？
「よし諸君、新人を加えて仕事だ」
どうやら、クエスはここでリーダーのようだ。完全に仕切ってる、厨二病の癖して結構みんなからの信頼厚いようだ。
「東君、これ渡しておくね」
雪村さんが僕にドラ〇ンレーダーのような、丸い物を渡した。
「吸血鬼探知機だよ、クエスちゃんがワックのハッピーセットのおもちゃを改造して作ったんだよ」
まじか、クエスがどや顔でこちらを見てくる、まぁ誉めてあげよう。
「クエス、すごいな」
「心にもない言葉をどうも、仕事の内容だが、吸血鬼をこの町から根絶するまであと少し、残り三体だ」
クエスは吸血鬼探知機を片手に喋る、僕も吸血鬼探知機をクエスと同じようにしていじり起動させると、ドラ〇ンレーダーのように目的の存在がある場所に矢印は方向を向いていた。ここからは遠い

ようだ。
「残り三体はかなりやっかいだ、知能が高く身体能力も尋常じゃない、そこで、アズ貴様の出番だ」
クエスは僕を指で指す、この眼帯少女はなにを言い出すんだ？
「まて、クエス彼は戦闘が行えるのか？とてもそうは見えないぞ」
「我の目で見た限りは可能だここにいる誰よりも強い、戦い方を教えてやれモエ。」
佐藤さんとクエスの会話を横で聞く僕、佐藤さんが僕を怖い目で見ると手招きをした。僕は手招きされるまま、佐藤さんについて行って気がつけば。ビルの外にいた、相変わらずの暑さ、朝と変わらずに蝉たちが大合唱。
「あの佐藤さんこれからどこに？」
「モエでいい」
歩きながら、呼び名を教えられる。彼女はクールだ無駄口が一切ない、しばらく彼女に連れられてやってきたのは、路地裏のまったく使われてない朽ちた、バスケットコートだった。人気がまったくなく、蝉の鳴き声も聞こえない。
「さぁ始めるか」
その言葉を吐いた瞬間、モエは僕の腹部にパンチをえぐり込ませた。
「かはっ！　痛い、なにするんだ！」
モエは黙って次の一撃を入れる体制に入る、蹴りだ。蹴り飛ばされ吹き飛ぶ僕、どんな脚力してるんだ？
痛い、もういやだ何でこんな目に僕が。
「戦え、東これから生きるか死ぬかの戦いに巻き込まれるのにそれじゃ即死だぞ」
どうしたらいい、これじゃ吸血鬼とかの前に、彼女に殺されかねないぞ。
「畜生やればいいんだろ！」
僕は立ち上がり、彼女が次どう来るか予想する。

「距離が離れていれば、こういう攻撃も可能だ」
彼女は懐から何かを取り出した、それはナイフ、まさか！？
「ほら、いくぞ」
やっぱりね、投げて来た、だが甘いナイフの扱い方じゃ僕の方が上だ、僕はポケットに入っていたナイフでモエの投げたナイフをはじく。鉄のぶつかる音がバスケットコートに響く。
「さぁ、ここからは本気だ」
「やる気になったか、いくぞ！」

「クエスちゃん、二人どうなってる」
「アズが本気になった、我はやはり見誤ってなどいなかった！　彼はサヴァンシンドローム、それも今までにない例だ！」

モエがナイフを拾う、ナイフは朽ちたバスケットコートに垂直に刺さっていた、そして逆手持ちで構える。
「そういう構えも有りか」
僕はモエと同じ構えをする、さぁ来てみろ、一瞬んで決めてやる。
「うおおぉぉぉ！」
モエが突っ込んで来る、だが今の僕にはその動きが水中に没したかのように見える、つまり超低速の世界。
キィンと言う金属のぶつかる音、数秒してから僕はナイフをポケットにしまい、振り返る。モエの手元からナイフは吹き飛んでいて、何処かへ行ってしまった、そして次の瞬間モエの服がビリビリに破ける。
「キャァァァァァァァァァ！」
叫び声、何故かその声は僕にとって安心できた、モエは恥ずかしそうに、両手で体を覆う。さてこの後どうすればいいのだろう。
「私の負けってことね…で、でもこれは、酷い」

あ、どうしよう泣きだしてしまった、悪い事したかな？　そうだよな悪い事した。彼女の肌は雪のように白く透き通ってて綺麗だ。
「正直すまんかった」
ため息を吐きながら謝罪、心から謝罪、しばらくしてメイドの桐生さんが来て、モエに新しいスーツを渡した。
「お着替えを、お持ちしろとクエス様から言われて参りました」
「やっぱりクエスは見てたか、あの眼帯の下の何もかも見通す目で」
クエスの眼帯の下の目は青いカラーコンタクトでも入ってるかと思ったが、何やらすごい秘密があるようだ。
モエが、スーツを着てから朽ちたバスケットコートを僕達は後にし、ビルの最上階へ戻った。
「アズ、見事だったぞ私もこの目を持った甲斐があったというものだ」
そりゃ良かったね、モエは精神的にかなり傷ついてるんだけど、慰めてやれよ、誰か。
「私は先に家に帰る、今日の事を早く忘れたい、スーツが…スーツが…」
裸をみられた事より、スーツを破かれた事の方が堪えている様だ、変わった人だ。
「アズ、お前あのナイフの技をどこで？」
「まて、何故僕のナイフのことを？」
クエスの一言がモエの言った、言葉を思い出させる、まさか言葉通りの意味ってことか。
「ああ、そういえば我の目の説明がまだだったな」
そう言ってクエスは眼帯を外す、前にも見た事のある筈の瞳が、一瞬恐ろしく思える。
「この目は人間に限り、その者の本質や能力といった、あらゆる情報を見抜く事が可能だ、それ以外にも遠くを見渡したりできる」
その目でさっきの戦闘もまさか、見ていたっていうのか。
「だがこの目は制御不能、故に我は眼帯をしている。」

クエスは眼帯をし直す、外はもう日が暮れ始めた、蝉たちの鳴き声が若干ではあるが静かになる。
「嘘じゃないみたいだね、僕のナイフ技は昔、祖父がやっていた事の見よう見まねさ。」
自分でも見よう見まねで、できる範囲じゃないのはわかっているが、昔から何かを教えられると、一瞬で覚えられるから便利な頭だと、楽観視してきた。
「クエスちゃん吸血鬼達の詳細位置と行動パターンがまとまった、やるなら明日がオススメかな」
部屋の片隅に置いてある、パソコンに向かっていた雪村さんが、クエスにプリントアウトした紙を渡しながら言う、ふと見たパソコンのデスクトップの壁紙にはエロゲーのエロシーンのＣＧが…。
「東君のエッチ！」
「え？　なんで？」
「乙女の秘密をそんなに凝視しないで」
「す、すいません」
何故か謝ってしまった、最近は女性でもエロゲーを…男性の場合使用目的があるから買うのが大半であるが、女性はいったい何が目的で買うのだろう。まさかとは思うが使用目的が！　そんな訳ない、ある筈がない。
「どうだ？　そのゲームどこまで進んだ？」
「うーんまだ、同人誌のネタまではこぎつけてないなぁ」
そういえば、このサークルには世を忍ぶ借りの姿がどうとか、クエスが言っていたのを思い出す。
もう今日は帰ろう、日も完全に落ちてきた。
「じゃクエス、僕帰るね」
「気を付けて帰れよ、明日は初仕事だからな、ゆっくり休め」
明日か…少しだけの不安と好奇心が胸で渦巻いた。メイドの桐生さんが送り出してくれた。

午後十時、僕は自宅まであと数百メートルという地点まできた、今日は大分帰りが遅れてしまった。
「うわぁぅぐっ」
急激な頭痛がいきなり僕を襲う、あまりの痛みに、地面にのたうち回る。

ナニヲシテル？　ナゼコロサナカッタ？　アレダケノモノヲ。
またお前か、あれだけの物？
ソウダ、コロシタクテタマラナカッタロ、ナニヲガマンシテル。
アナヲウメルニハ、ウバウシカナイニ。
うるさい黙れ！黙れ黙れ黙れ！
ナラココデ、カワリヲサガセ、ホラ、イタゾ。

声が指し示した方向には会社員風の男が歩いていた、僕はナイフを右手に、今日見たモエの構えで、そのまま。

ピシャリ

「なん…だ、なんだよこれ」
会社員風の男は原型をほぼ留めていない形で、内臓を何かにえぐり出されていた、僕は右手のナイフを見る、血がはっきりついてる、不思議と自分の服には返り血はなかった。
なんだ、他に誰もいないってことはこれは僕が！　いや違う！
ものすごい吐き気がする、僕はその場を走り去ることにした。家まで全力疾走。その後そのまま、僕は家で気を失った。

吸血鬼と殺人鬼（前書き）

この物語を読むに時に読者の皆様に気をつけて頂きたい、事柄がある。この物語はアブストラクト、つまり抽象的な日常を描いた物語。いまある常識を全て捨て去り読むことを、強く推薦する。また残酷極まりない行動をとる主人公たちが許せない方々は読むことをオススメできない。

　この物語に出てくる人物たちは少なからず精神的におかしく、読者の皆様に悪影響を及ぼす可能性もある、それでも「大丈夫だ、問題ない」という方はアブストラクトデイズをお楽しみ頂ければ幸いである。

※横にして読んで下さい！

吸血鬼と殺人鬼

朝だ。昨日の帰宅した時、僕は気を失い倒れた、理由は現実感のないようで、あるような、異常な体験のせいだ。
黙って起き上がり、テレビの電源を入れて待機、あれだけ派手にやればニュースくらいには、なるはずだ。朝のニュースを見ながら僕はしばらく動かず、ぼーっとしていた。小一時間時間が経つ。

「やらない？　なんで？」

僕は、ただその後テレビを消して昨日、人を殺したであろう場所に足を運んだ。
僕は驚いた、血の後もなければ死体すらない。一日やそこらで消えるような、痕跡ではないはずだ、だが確かに殺した僕がこの手で、バラバラにした、内臓をえぐり出し原型を留めない状態まで、これでもかってくらいバラバラにした。
「人を殺した感覚が確かに手に残ってる」
家に戻ろうと、振り帰った。
「あ、桐生さん」
「クエス様からお迎えにとの命です」
クエス、そうだ今日は吸血鬼とやらの相手をするんだっけ、僕は昨日から現実を観ていないような気がする。
桐生さんは僕を連れて人通りの多い大通りへ向かった、そしてタクシーを呼び止めると、目的地を運転手に指示、数十分程でビルに到着。
「私はこれにて、失礼いたします」
桐生さんは丁寧な礼をして、街の雑踏の中に飲まれていった、一つ気になる事があるとすれば、街中でメイド服は目立ってしまう、悪い意味で。

桐生さん、気にならないんだね。
「さて、最上階にいくか」
そういえば何故クエスは、桐生さんを迎えになんか寄越したのだろか？　エレベーターに乗ったまま僕は素朴な疑問と向かい合っていた。
エレベーターは最上階へと上がり着く、扉が開いてその先にある玄関のドアを合い鍵を使って中に入る。
空調の利いた広い部屋には、クエスと雪村さんがいた。
「クエス、モエは？」
「先に行った、我もこれから向かう」
厨二病の少女は部屋の中央にあるソファに座り紅茶をすすりながら、僕を見て言った。
「僕は何をすれば？」
「吸血鬼退治、といいたいが今日はくつろいでろ昨日の事で頭が痛いだろう」
昨日の事、まさか彼女は僕が昨日何をしていたか知っているのか！？
「クエス、昨日僕は…」
言いかけた所でクエスは手のひらを僕の口に当てて、塞ぐ。
「言わなくていい、ここにいる人間はみんな同じような者だ。」
みんな同じ？　どういうことだ？　要するに人殺しの集団って事か、最初から狂ってるとは思ってたけど、主にクエスが。
「なんだと、こら」
クエスの両手が僕の首を絞める。
「人の心を読むな…く、苦しい」
「まぁいい、我は仕事に向かう」
クエスの両手が首から離れる、クエスは玄関に向かいドアを開けエレベーターで下へ降りていった。
「あ～ず～ま～くん！」
「はにゃぁぁ！」

雪村さんが、僕の背中に飛びかかって抱きつく、みずもちの様に柔らかくてふわふわとした弾力感の強い物が、首の後ろあたりで弾むようにして押し当てられる。
「東君小さくて可愛いねぇ」
僕の頭を撫でながら、雪村さんは少しだけはなれた。
「雪村さん、暑苦しいです」
「雪村さん禁止！かえでちゃんって呼ぶように言ったよ」
正直、僕は参っていた女性を「ちゃん」付けで呼んだことなどない、それに他の皆はこの人を「ちゃん」付けで呼んだ所を見たことがない、「ちゃん」付けするかどうか迷ったあげく僕は答えた。
「僕を東君って呼ばずに、アズって呼んでくれたら、言います」
「アズ」
躊躇なし、そりゃそうだ。ちゃん付けと、僕のあだ名じゃ天と地の差があるのだから。
「うぅ…恥ずかしい！」
顔を物凄く赤くして、雪村さんは僕から更に離れる、急にどうしたというのだろう。
「男の人の名前なんて初めて言ったよぉ！」
いえ、あだ名ですしかも僕の名前は東ですそれに「君」付けで普通に呼んでました、人と違った感覚の持ち主ってのは多分こういう人の事だと、僕は思う。
「言ったよ、アズ…さぁどうぞ」
「か、かえ…かえでちゃん」
「よくできました☆」
無邪気な人だ。
彼女は部屋の中央に置いてあった、無線タイプのマイクを耳に付けると、ノートパソコンを開いてキーボードをカタカタと打ち出す、黒いウィンドウに文字が並ぶ、なにかのプログラムのようだが僕には理解不可能。黒いウィンドウが映像に変わる。
映像に映っていたのはモエだった、モエがいる場所は何かの建物

の中だった、壁紙は剥がれ所々瓦礫で道が塞がれていて、鉄骨が剥き出しの部分が多い。
かえでちゃんが、無線タイプのマイクのスイッチを入れると話始めた。
「モエ、聞こえる？」
「聞こえる、ターゲットはまだ姿を出さない」
「クエスちゃんが向かってるから、彼女が来るまで待機してね」
「了解」
映像の向こう側のモエとの会話を終えて、さらに映像を展開していく。まさに凄腕ハッカーという相応しい存在だ。
そう言えばクエスがここの人間は同じようだとか言っていたが、かえでちゃんは他の人より普通に見える。
「かえでちゃんは、なんでこのサークルに？」
彼女は無線タイプのマイクをテーブルに置いてため息を深くついたて、怖い目で僕を見て言った。
「人をおとしめる仕事を生きる糧にしてた頃に、クエスちゃんに助けられたの。仕事は個人情報の売却」
随分物騒な話しだ、世の中は便利になると必ずこういった、ハッカーが皮肉にも活発化する。
「ある日、尻尾を警察に捕まれちゃって逮捕寸前まで行ったよ、その時私を逃がしてくれたのが、クエスちゃん。逃がす変わりにサークルに入って手を貸すって約束で私はここにいるの。」
「へぇ～」
世界広しと言えど、僕達みたいな変人の集まりは多分此処だけ、アンデッドヒーローズのみだろう。かえでちゃんはノートパソコンから離れて、僕に歩み寄る。
「君はなんで此処に？」
「クエスを助けたんだ、暑さで倒れてたところをね。」
あの時彼女を助けてなかったら、僕は今頃きっと家にこもりっきりの夏休みを過ごしていただろう、そういう意味では僕を外に連れ

出してくれた恩人と言えるだろう。
「ここのメンバー、つまり桐生さん、モエ、私はクエスちゃんに少なからず助けられて、ここにいるんだけど君は特別みたいだね。」
「特別か…」

僕は小さい頃から見たものをそのまま完璧に真似る事ができる、一ミリの誤差もなく。これを僕のおじいちゃんはお前にしかない特別な能力だと言った。僕はその反面自分が怖かった、普通なら喜んだり誇りに思ったりするのに、僕は普通から逸脱した事に物心ついた頃から、怖かったのだ。
理由はわからない、ただこのままだと、何かを失いそうだと気づいていたような、気味の悪いなにかが自分を押しつぶしにくるような気がして嫌だった。いつしか、特別扱いされるのが嫌いになっていた。

「クエスちゃんが配置に付いた、モエ状況は？」
「変わらない」
気がつくと、かえでちゃんはノートパソコンに戻り無線タイプのマイクをまた装着していた。
「アズ、みてて吸血鬼狩りが始まるから！　モエやっちゃって！」
嬉々とした表示でかえでちゃんは言った、映像の向こう側のモエは、しばらくしてからビルの中でナイフを構える。
「来たわ！　二体！　上の階から」
「了解！」
映像の向こう側のモエのいるビルの上の階から人影がものすごい速さで降りて来る。
「そこ！」
モエが片方の人影の胸にナイフを投げて仕留める、もう片方は近寄り足を蹴りで払って、ひざまずいた所で顔を両手で捕まえてから、

嫌な音が響くまでひねった。
「お疲れ様モエ、もう一体はクエスちゃんが見張ってるから戻っていいよ！」
「了解」
モエが倒した人影は、砂となって消えた、人間は砂にはならない…これが吸血鬼、本当にいるとは驚きだ。
「あと一体か、クエスならやれるよね？」
僕は心配だ、彼女は力もなさそうに見えるし、身長も僕より少し低い、そんな女の子が奇妙な奴と殺し合うのだから。
「大丈夫だよ、クエスちゃんには目があるから。そろそろ夏コミだなー同人誌仕上げないと」
なんだ？　いきなり緊張感のないセリフに少し驚く、そういえばクエスが「普段は、同人誌や同人ゲーム」を作ってるなんてセリフを吐いていたのを思い出した。
「どんな同人誌？」
興味本位に質問を投げかけてみた。
「よくぞ聞いてくれました！　ＶＯＣＡＬＯＩＤのＲ１８指定の同人誌さ！」
聞くんじゃなかった、そんな事に少しだけ興味引かれた自分が嫌になる。別の部屋で少しくつろごう。
「なんじゃこりゃ！」
僕が他の部屋の扉を開けて、中に入り扉を閉めてから叫んだ。視界に入っきたのはエロゲーの山、キャラクターのタペストリー、今までの創作物と思わしき同人誌それも全てＲ指定！
ダメだ、こいつら早くなんとかしないと。ちょっとした新世界の神になりそこなった人間のセリフを頭の中に連想する。

それから数時間

「戻った。」

クエスが、玄関を開けてすぐに、リビングのソファーに寝転ぶ。服が汚れていて、かなりボロボロだ。
「逃がした！　不覚！」
「逃がしちゃったの？　仕方ない明日また探し直そう、今日は同人誌仕上げちゃお？」
「わかってる」
かえでちゃんとクエスは先程僕が見てしまった、いかがわしさ満載の部屋へ入っていく。
窓から夕日が差し込む、もうこんな時間か、僕は二人に帰宅を伝えビルを降りた。
「今日はなにもしてないのに疲れた感覚がする、ふぅ」
夕暮れの帰り道、蒸し暑さの中人気の少ない道路をフラフラと歩いていると、紫色の髪の色をした珍しい恰好の女の子が道端で倒れていた。前に見たことある光景だ。
「大丈夫ですか？」
「大丈夫だ、問題ない」
このくだりは二回目だ、ヤレヤレ勿論このミステリアス極まりない人も、どこかの誰かさんの如く、大丈夫じゃない、大問題だ。自分の家まで運ぶ事にした。

「生き返ったー」
このミステリアス極まりない人は僕の背中で顔だけを上げて、そう言うと背中から降りて靴を脱ぎ、僕の部屋でくつろぎだした。
「あ、そうだ　ありがとうございます」
「別に気にしなくていいよ、なんであんな所で倒れてたの？」
「私、吸血鬼で日の光に弱くて」
勘弁してくれ、吸血鬼？　クエス並みに危ない厨二病か？
「さっきまで両目の色の違う子に殺されかけてて、そのせいで外に出る事になっちゃって」
まてよ？　両目の色が違う？　おいおいクエスが退治しようとし

てた吸血鬼ってまさかこの人か、吸血鬼には見えないな。
「仲間も随分減らされちゃった」
「仲間って吸血鬼の？」
「あれ？　信じてるんですか？　意外です。」
「君が吸血鬼なら僕は殺人鬼だよ、仲間だし、似たようなもんだ」
心にもない言葉、最近有り得ない事につきまとわれてるせいかな？
僕は彼女に軽く自己紹介をした、彼女の名前は吸血鬼には似合わない、至って普通の名前「吉野春」というらしい。
「はぁ、これからどうしよう」
吸血鬼が深く溜め息をついた、そのセリフは僕も言いたいが、今は止める事にした。
「血が吸いたい…」
わーお、さらっと怖い発言を言わないで欲しいな。吸血鬼は僕を亀のような目で見つめだす。
「冗談だよー私は血必要ないし」
「ん？　吸血鬼って普通は血を吸うのが食事じゃ？」
彼女は首を思いっきり横に振る、長い髪が大きく揺れる。
「私は吸血鬼だけど、半分人間なんだハーフって奴だよ。お母さんお父さんはついさっき殺されたけどね」
またさらっと怖い事を言う、父と母がいないと言う話はもう聞きたくない。嫌気がこみ上げてくる。
「これからどうするの？」
「かくまってくれない？　殺人鬼…」
僕を殺人鬼と言った吸血鬼の顔は少し困った様子、匿うのは構わないが、明日にでもクエスは彼女を殺しに来るだろう。
なんとかしないとな、彼女は血を吸わないらしい、なら危険性は皆無だ事情をクエスに説明すればいい。
「わかった、しばらくここにいていいよ。」
「ありがとう、あなたいい人なんだね」

そういうと彼女は壁の方に背中をよりかけて目をつぶった。
「布団ならあるけど？」
「初対面の人とは寝ないのが普通」
「いや、使っていい僕は布団で寝ないから」
「そう、ありがとう」
僕は布団を床に敷いて、彼女が眠りに着いたのを確認してから、壁に背中をよりかけて眠る事にした、外は既に夜で月灯りが窓から静かに部屋に、差し込んでいた。

「そろそろ寝たかしら」
オキロ、エモノダ
「それじゃ、いただきます」
コロセ！

吸血鬼と殺人鬼（後書き）

殺人鬼と吸血鬼のお話しが次回からメインになります、多分ですが。

また次回で

殺意の喪失（前書き）

この物語を読むに時に読者の皆様に気をつけて頂きたい、事柄がある。この物語はアブストラクト、つまり抽象的な日常を描いた物語。いまある常識を全て捨て去り読むことを、強く推薦する。また残酷極まりない行動をとる主人公たちが許せない方々は読むことをオススメできない。

　この物語に出てくる人物たちは少なからず精神的におかしく、読者の皆様に悪影響を及ぼす可能性もある、それでも「大丈夫だ、問題ない」という方はアブストラクトデイズをお楽しみ頂ければ幸いである。

※横にして読んで下さい！

殺意の喪失

吸血鬼が牙をむき出して、こちらを見据えてる、草木の眠る丑三つ時に物騒な奴だ。
「…クックック」
「…！！」

ヨウヤク、デレタ！！

目蓋をゆっくり明けて、自意識があるのを確認する、そして身体の動作に異常はないか動かしてみる、吸血鬼は驚いて後ずさりをして、五歩ほどの所で止まり警戒した目で俺を見る。
「お前、東じゃないな」
「カンがいいな吸血鬼、そう俺が殺人鬼の東だ。」
さて、この吸血鬼をどう解体するか…やはり牙をナイフでえぐるか？　すぐに殺すのはもったいない、とりあえずは外に出よう！
それからだ！
俺は吸血鬼の首を掴んで玄関のドアに投げつける、バンと音がしてドアが開く、ナイフを構えて追い討ちの体制に入り走り出す。
「そうはいくか！」
吸血鬼はマンションの五階からあろうことか飛び降りる、手すりから下を覗き込むと吸血鬼は平然と歩いていた
普通の人間なら飛び降たら足の骨が折れる。だがそれが違うのは俺も同じだ吸血鬼と同じように俺も飛び降りて、着地点で前転をし受け身を取る。
「なんて人間なの！」
「クックック、逃げんなよ人の血狙っといて」
「冗談じゃない、命がいくつあっても足りやしないわ！」
吸血鬼は逃げ出す、マンション周辺の路地裏へ入り込んで行く。

俺は彼女を追いかけて行く、鬼ごっこかそれも楽しいだろう。
「おーい鬼ごっこ？　いいぜぇ」
「しつこいなぁ、はぁはぁ」
俺は追いかける、月夜を背に宿し走り呼吸が荒くなる、しっかり息が出来ない…狭い道は行き止まりが多い、そこまで追い詰めればいい、後は奴を解体して「失った」部分を補えれば良い。
「残念、ゲームオーバー。」
吸血鬼を行き止まりに追い詰める、悔しそうな目でこちらを見る。
「否、ゲームオーバーは貴様だ」
聞いた事のある口調に声が俺の後ろからする、振り向くとクエスが眼帯を外した状態でそこにいた。
「おやおや、クエスじゃないか」
「目を覚ませ、アズ」
「覚めてるぜというより、ようやく覚めた」
クエスは鋭い目つきでこちらを
睨む、拳を強く握り力強く歩き出す。
「なるほどな…裏が出たか」
吸血鬼に再度視線を送る、棒立ちから戦闘の意が確認できる体制になる、だが狙いはクエスのようだ。俺は無視かよ。
「クエスＶＳ吸血鬼、見ものかなぁ」
俺は民家の塀の上に飛び乗り、二人が向き合ってる状態を観察する。
「おい、吸血鬼今は一時休戦だ」
「奇遇ね私もそう提案しようかと思った所だったわ」
なに！？…つまらないなぁ。
「まずはこいつを倒す」「まずはこいつを倒す」
二対一…まぁそれも悪くないな。
「いいぜ、まとめて相手してやろう、クエスは目、吸血鬼は牙をまずは解体してやるか」
ナイフを構えて民家から降りる。

「吸血鬼！　私の目で奴を見透かす！　指示道理に動け！」
「気にくわない、けどそれしかなさそうね！」

友達との買い物が終わる頃、時刻は十二時を回っていた、こんな時間まで友達と遊んでしまうとは、我ながらはしゃぎすぎてしまった。帰りが遅いと父親に怒られるので少し駆け足で近道をする、住宅街の路地裏に入る確かに近道だが最近の様子からして物騒なのは変わりない。
月灯りと数本の街灯だけが私の歩く道を照らしていた、静けさと暗闇が支配するこの世界では、闇に潜む何かを人々に想像させると共に、やわらかな恐怖を与えてくる。
だが、それは一軒のマンションを見た途端私の頭からするりと消えた、このマンションには自分の従兄弟が居ていつもその笑顔を思い出すと、心が何故かやすらぐ。
「アズ、大丈夫かな？」
不意に若い男の笑い声と共に、女性の声が夜道に響いた、男の声の方に聞き覚えがあった。
私は嫌な予感がして声の方向へ駆けていくと、ナイフを持った従兄弟が鬼の如く、女の子を斬りつけようとしていた。
「次は右からだ！　避けろ！」
目の色が片方違う少女が、髪が紫色の少女に指示を出す、従兄弟の回し蹴りを回避させている様に見えた。
「ちっ　やっぱりあの目から殺るか」
従兄弟の標的が変わると、ほぼ同時に私は彼の前に飛び出していた。
「東！　なにしてるの！」
「加奈子ねぇさん、どいてくれそいつ殺せない。」

「なんで！　なんでこんな事するの！」
「失った物を補う為、他者から命を奪う、そういう衝動が俺をそうさせる」
従兄弟の口調が他人を完全に見下している、一人称もいつもなら僕だった、何かがおかしい。
「どきな、あんたがそいつとどんな関係か知らないが止められるような相手じゃない。」
目の色が片方違う少女が言った。
「それにあれは、アズじゃない別人に体を乗っ取られてるのさ。」
「別人？　なにそれ…」
片方の目の色が違う少女はそれだけ言うと、従兄弟に走って向かっていった。
「いくら動きが読めても、体は追いつくかな？」
「うあっぐ！」
従兄弟は少女の腹を回し蹴りで攻撃、少女は避けようとするが間に合わず、まともに食らって吹き飛ばされてしまった。
「アズ！　止めて…なんで！」
叫ぶと同時に私の脳裏に従兄弟を止める方法が思い浮かんだ。
「これを見なさい！」
「ん？」
私は上着を全て脱ぎ捨て、ブラジャーを外した。
「ヴァァー！」
鼻血を吹き出して倒れる従兄弟。
「止まったー！」「止まったー！」
口を揃える二人の少女。
「…なにやってんだ、私」
脱ぎ捨てた服を広い集めて着る、正直こんな方法で止まるとは思ってなかった。これは思春期男子専用の技として今後、人気のない場所で使っていこう。
従兄弟の鼻血は地面に鼻から広がって行き、辺りは血の海となっ

ている、しかしあの大人しいアズがなんで女の子を襲うなんて事を？
「そこの二人はアズの知り合い？」
最初に片目の色が違う少女が答えた。
「我の仲間だ、たまたま通りかかったらアズが別人の如く、そこの吸血鬼を襲ってたんだが、すぐにアズじゃないとわかったから。アズを止めようしたんだ」
吸血鬼？　厨ニ病かな？　吸血鬼と呼ばれた少女は私に近づいて口を開けた、犬歯が異様に長く、人の首を食いちぎり血を啜るには充分だった。
「……まぁいい、それよりアズを家に運ぶから、二人は…」
「ここで殺す」「ここで殺す」
「こら、待て！」
にらみ合った二人の頭を小突いた、二人は私を見る。
「何があったかしらないけど、そんな事を女の子が言うもんじゃないよ、二人…わかった？」
二人は嫌そうな顔をして頷いた、倒れてる従兄弟を持ち上げて、マンションに入る、テレビと布団と小さなテーブル、相変わらずの殺風景な部屋だ。
アズを布団に寝かせて私は自分の家に帰ることにした。大分時間が経過している、親の一喝ぐらいは覚悟しておこう。

夜目を閉じてる時に見るのは目蓋の裏、夢は決して見ない僕はみちゃいけない、人が死ぬから。
僕の夢に出てきた最近の人々は夜中に通り魔の被害に遭う、そして必ず死ぬ。
気づいてるんだ本当は自分が犯人だって事、でも抑えようのない衝動に駆られて我慢しようと必死になる時には既に人を殺した後、

手遅れ。
僕は殺害衝動を抱えて生きる化物、ジャックザリッパー。
「アズ、私がもうすこし早く気づいていたら」
「クエス…？」
「あ、起きた」
目を開けると自分の部屋で、クエスしかいなかった、春の姿が見当たらない、そして自分の鼻の穴にはなぜかガーゼが詰められていた。
僕は鼻のガーゼをとり目の当たりにする、血がかなり染み込んでいた。
「いったい僕はなにを…朧気にしか思い出せない」
「思い出せなくていいだろう、貴様は先程まで人を殺そうとしていたんだ」
「知ってる、僕が最近の通り魔なんだよね…今回は春を殺そうとしてたのかな」
春とは、吸血鬼の名前だ吸血鬼のくせに名前だけはやたらと普通の名前だ、僕は今の時刻を確認する。
時刻は午前二時を回っていた。
「春？　ああ、吸血鬼の名前か」
「ところで彼女は何処に」
「自分の家に帰ったよ、正確には根城といったほうが正しい。」
クエスは溜め息をついた後、僕に質問をした。
「いつ頃からお前は殺人鬼に？」
「両親が死んだ時かな、人格が一つ増えたんだ事故のショックでね、殺人鬼を抑え込む為に僕は必死に今までこらえてたんだ、だけどさここすぐ横が高速道路だろ」
僕は部屋のカーテンを開けて高速道路の方を静かに見つめた。微かに車が轟音をたてて、走ってるのがわかる。
「この音は夜にやたら耳に入ってくるんだよ、そうすると忘れよう

としてる事も忘れられなくてね。」
「交通事故か…」
「そして、見事に抑え込んでた殺人鬼が爆発したんだ。」
僕はゆっくりとカーテンを閉めて、部屋から出る為玄関を開ける、遅れてクエスが付いて来る。
「何処にいくんだ？」
「付いてきても、つまらないよ」
「今のお前は不安定だ、目を離す訳にはいかない」
もの好きな子だな、これから僕が何をするかなんて、誰もわかりはしない、僕はマンションを出て高速道路に入る為の階段を上る、高速道路には歩行者用の歩道が設けられている事を僕は知っていた。
歩道に到着してしばらく僕とクエスは車道を眺めていた、吐く息が夏なのに白く凍るのが見えた気がした。
「クエスとは、ここでお別れだよ。」
「アズ待て、なにを…！」
僕は自ら車道に身を乗り出し、時速八十キロは出しているであろう、トラックに自ら跳ねられた。
薄れて行く意識の中、僕が最後に見たのは自分の血と僕の近くですすり泣くクエスの姿だった。

なにもない世界、自分だけがこのなにもない世界の空間に居るのが解る、視界は無限の闇に包まれていて自分が目を開けているのかどうかも曖昧だった。
肩に何かが触れる感触がした、誰かと思って振り替えると、殺人鬼の自分が立っていた。
「お別れ？　わらわせるなよ、俺を殺す気だろ」
「正解、死ね殺人鬼」
なにもない世界で僕は自分の殺人鬼に対して言葉の刃を突き立て、その後本物の刃で彼をバラバラに解体した。

今日も東京都では、奇妙な事件が沢山起こる。それでも私達はそれに立ち向かって生きていかなければならない、なんて不幸な世界なんだろう、不幸と言えば、彼はまだ病院で眠っている。

時々見舞いには行っては、花を花瓶に添えるだけ、あの夏が過ぎてもうかなり経つ。

今日は彼の見舞いに行く、今日こそ起きて欲しい。彼の病室のドアを開けて、花瓶に入っている枯れた花を取り替える。

赤毛の彼の髪は女のように長く伸びていてこうして見ると、彼は本当に中性的な顔立ちをしていて、初めて見る人にとっては絶対に性別なんか、わからないだろう。彼が何故あの時死に急ぐような行動をとったのかは、知るすべは今ない。

ただ一つ言えるのは彼は不幸な人間で、この世に神様なんていないんだと思い知らされる事だけだ。

あれから約2ヶ月の月日が経ったある日の事。

貴様はいつまで寝ているつもりだ！　なんて彼の病室で一人叫んでみたりした、無論起きる訳がない…定期的に彼の元へ訪れては、私は返答のない彼との会話をするようになっていた、今日の活動や解決した事件の数々。

私は無意味と知っていても、会話を止めなかった、多分私は彼の事が…。

寝ている感覚が解る、体をゆっくりと起こそうとするがバランスが取れず起きる事を諦めた、看護婦が部屋に入ってくる点滴の取り

替えの様だ、僕は看護婦に声をかけた。
「看護婦さん、今日何日」
「……だれか、先生を！」
看護婦が慌ただしく部屋を出て行った、今気がついた僕は目を開けていない、久しぶりに見る世界が怖いのだろか…僕は目を開けた部屋に入り込む日差しが異様に眩しい、無理もない目を長い間あけていなかったのだから。
病室に誰かが入って来た。
「久しぶりね、意識不明って聞いていたけど？」
「ついさっき意識が戻ったんだよ、春」
「意識が戻ってこれからどうするの、あの時の続きでもするの」
この言葉に僕はひどく違和感を感じた、あの時というのはいったい何時の事だろう、いや覚えてるようで覚えてない…ひどい違和感だ、数秒経ってから僕はようやく彼女にあの時とは何時の事かを聞くという答えに行き着いた。
「あなた、忘れちゃったの？」
「思い出せない」
まるで心に穴が開いているような違和感、僕は彼女になにをしたのだろう、彼女は答えを教えてくれはしなかった。呆れた表情なのがよく解る。
ふと疑問に思った、僕の中で彼女を見ると騒ぎ出す何がいない。それ以前に彼女と出会う前の事をまったく覚えていない、朧気に頭に浮かんでくるのは、眼帯の少女の姿だった。眼帯の少女の周りには人が数人いる多分仲間だ、何で自分も仲間なんて感覚があるんだろう？
「誰か来るわね、私これで…」
「待って！」
「悪いけど用なら後で」
そう言うと彼女は病室から、一瞬で風にさらわれるようにして、部屋から消えた。

「誰かいたんですか？」
遅れ入ってきた、主治医と思われる男性に問われたが、誰もいなかった一人事だと言ってごまかした。
「目の色が変わってる…後天性か」
主治医の男性が僕の目にライトを当てて言った、どうやら僕の目は変色しているようだ、後々に精密検査などが行われ身体に異常はないか隅々までチェックされた、結果は異常なし普通の健康体だった、一部を除いて。
「記憶喪失か」
それが心に開いた穴の正体なのだろうと僕は勝手に悟っていた。
それから数日僕は狭い病室から解放され、外の空気をようやく吸えた。
「春、彼女の名前だけ覚えてる」
「呼んだかしら？」
背後に突然現れる彼女にすこし驚いてから、僕は彼女に質問した。
自分が何者で、何をしていて、どうなったのかを。

殺意の喪失（後書き）

キャラクターのプロフィールとか
やった方がいいですかね？w

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1687y/

アブストラクトデイズ

2011年12月25日02時45分発行